令和８年度　ときわ会教育研究発表会　社会科⑪　発表要項

歴史学習における、社会に対する課題意識をもてる生徒の育成
～自分の選択した現代の課題を追究する活動を通して～

胎内市立中条中学校　教諭　髙澤克幸（平成２９年度）

【主張】
歴史に関わる諸事象について、よりよい社会の実現に向けて課題を主体的に追究、解決しようとする態度は、歴史的分野で育てたい重要な資質・能力の一つである。しかし、学習指導要領の課題にも挙げられているとおり、その指導は難しい。これまでの指導を振り返ると、教師主導で現代とのつながりを示し個別の知識獲得を図ってきたが、生徒は語句を覚えることに留まり、歴史を大観したり、社会に対する課題意識をもったりするまでに至らなかった。 そこで本研究では、社会に対する課題意識を高めるために、生徒が自分の選択した現代の課題を、一人一台端末を活用した個別最適な学びの中で追究する実践を提案する。

１　研究主題設定の理由

『中学校学習指導要領解説社会編』では、改訂の趣旨として、「社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を充実」させることが示されている。これは、平成 20 年改訂の学習指導要領における社会科の課題であった「近現代に関する学習の定着状況が低い傾向にあること、課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業が十分に行われていないこと」の反映である。それを踏まえて、歴史的分野の目標には、「歴史に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養う」とある。

これまでの自分の実践では、生徒が歴史的事象に関心をもち、主体的に学習に取り組む姿を目指してきた。歴史の学習で、教師が現代とのつながりを示すことで、歴史的事象がどのように現代社会につながっているのか知ることができるようにしてきた。生徒は語句を覚えるなど個別の知識獲得には意欲的ではある一方で、歴史を大観したり、現代とのつながりを意識したりすることは十分にできていなかった。これは、生徒が教師からの一方向の授業を受けるばかりで、社会に対する課題意識を十分にもつことができていなかったためだと考えられる。現行の学習指導要領が全面実施されて以降も、「自分で課題を追究したり解決したりする活動」が授業内に十分に位置付けられていない状態が、依然として続いていた。

そこで本研究では、歴史的分野の最後の大単元となる「現代の日本と世界」において、生徒が自分の関心のある現代の課題を選択・決定し、その歴史的背景などを調べて、課題に対して自分には何ができるのかを考える活動を行う。生徒が社会に対して課題意識をもち、主体的に学びに向かう姿を目指した。

研究仮説
「歴史学習において、生徒が自分自身の関心に基づいて現代の課題を選択し、その歴史的背景を調べて課題に対する自分の考えをまとめる追究活動を行うことで、歴史的事象と現代とのつながりに気付き、社会に対する課題意識をもつことができるであろう。」

※本研究における「課題意識」とは、生徒が現代に残る課題を自分にとって身近なものととらえ、解決に向けて自分には何ができるのかを考えようとする意識と定義づける。

２　研究内容と検証方法

⑴対象者　　胎内市立中条中学校３年３組　２３名

⑵研究内容

【手立て１】生徒とともに単元を貫く学習課題を設定する

単元の導入時に生徒が疑問をもったり予想したりできるような学習活動を行い、生徒の学習への関心を高めたうえで、生徒の言葉をつなぎながら単元を貫く学習課題を設定する。設定した学習課題を毎時間の授業や振り返りで生徒が意識できるようにすることで、単元末に行う追究活動への意欲が高まると考えられる。

【手立て２】生徒が自分で追究したい「現代の課題」を選択できるようにする

単元まとめの追究活動では、教師が用意した同一の課題に全員が一斉に取り組むのではなく、生徒が戦後から現代に至るまでの歩み（冷戦、高度経済成長、国際社会との関わり等）を踏まえ、現代の社会に残る課題を１つ自ら選択し、調べてまとめる。自分が選んだ課題であるからこそ、高い意欲をもって情報収集を行い、自信をもって他者に説明できると考えられる。

【手立て３】個別最適な学びを実現するために一人一台端末を活用し、学習形態を工夫する

生徒は自ら選択した課題を調べスライドにまとめる。生徒にはスライドの構成条件を明確に示す。そのうえで学習過程（どのように学ぶか)、学習形態（誰と学ぶか）を生徒に委ね、選択させる。教師は生徒に個別に声をかけたり、進捗状況に応じてつまずきへの支援をしたりする。また、調べる際は教科書だけでなく一人一台端末を活用させ、より広く情報を集めることができるようにする。これにより、生徒は自分のペースで自分に合った方法で学習を進めることができ、主体的な学びにつながると考えられる。

⑶検証方法

①生徒の授業の様子
②生徒の授業における成果物（作成したスライド、単元末のまとめの記述）
③事後のアンケート、振り返りの記述内容

３　研究の実際

⑴実践の概要

①単元名　　歴史的分野「現代の日本と世界」
②実施時期　令和８年６月～７月
③本単元における目指す生徒の姿

戦後から現在に至るまでの日本の動きに着目し、選択した現代の課題と歴史的事象を関連付けながら、多面的・多角的に考察し、よりよい社会の実現に向けて自分の考えを表現できる姿。

⑵実践の実際

【手立て１】生徒とともに単元を貫く学習課題を設定する

単元の導入で、１９４５年・１９５０年・１９６７年・２０１８年の銀座の様子を写した４枚の写真を、時期を隠して順番を入れ替えて生徒に提示した（**資料１**）。生徒は「車が増えている」「ビルが増えている」「町が発展していっている」といった理由を挙げながら、写真を古い順に並び替えた。その後、生徒はこの単元を学習するうえで考えていきたい問いを各自で考え、全体共有し、「戦後、日本の社会は世界とかかわる中でどのように変化していったのだろう」という単元を貫く学習課題を立てた。そのうえで、学習前の状態で学習課題に対する予想を記述した。そし

て、「変化」にはプラスの変化だけでなく、マイナスの変化（＝課題）も含まれることをふれ、単元の学習を通して日本の変化や新たに生まれる課題に着目していくように全体に確認した。

また、毎回の授業の終末で書く振り返りで、「今日の学習を通して、日本が変化したこと・課題だと感じたこと」を記述した。毎時間単元を貫く学習課題について考える時間をもったことで、生徒の課題意識を高めることができた。生徒は、北方領土問題、核兵器、沖縄の米軍基地問題、公害など毎時間の授業で学ぶ中で課題として残されていることに気付くことができた（**資料２**）。

そして、単元全体のまとめとして、単元を貫く学習課題に対する答えを個々に記述した。生徒はこれまでの学びを振り返りながら、戦後日本の変化を説明することができた。

【手立て２】生徒が自分で追究したい「現代の課題」を選択できるようにする

戦後から現代に至るまでを一斉指導で１０時間学習した後、「各自が追究する現代の課題を１つ選択し、学習計画を立てる」場面を設定した（**資料３**）。生徒は教科書や授業プリント、自分の書いた振り返りの記述を見返しながら、自分の興味に沿って追究テーマを選択した（**資料４**）。生徒には、２時間でテーマについて調べたりスライドにまとめたりして、１時間発表の時間をとることを伝え、見通しをもって学ぶことができるようにした。

【手立て３】個別最適な学びを実現するために一人一台端末を活用し、学習形態を工夫する

自分が選択したテーマをロイロノートで提出し、全員で共有できるようにした。これにより、他者参照（いつでもどこでも他の人の学習状況や学習内容を見て自分の学びの参考にできること）が可能となり、テーマ決定に迷っている生徒は他の人のテーマを参考にして自分のテーマを決めることができた。

生徒は自分で立てた学習計画に基づき、選択した現代の課題を調べロイロノートのスライドにまとめた。ある生徒は１人で黙々と教科書と一人一台端末を使って情報を集め、ある生徒は同じテーマに関心をもつ生徒の近くに席を移動し、共に調べる中でロイロノートのスライドにまとめた。教師は生徒の進捗状況を確認し、悩んでいる生徒に声をかけて教科書のどの箇所を参照すればよいか教えたり、同じ課題を追究する生徒同士をつないだりした。生徒は授業の終末で学習内容（その時間何がわかったか）と学習方法（どのようにして学習を進めたか、自分の学習は計画通り進んだか）を振り返り、スライド完成までの見通しをもつことができた。教師は生徒が授業後に提出したスライドを確認し、生徒の振り返りシートにアドバイスやコメントを記述した（**資料５**）。スライドの完成後、自分の選択したテーマについて相互に説明し合う場を設けた。過去の歴史的事象と現在の課題とのつながりや解決策を、説得力をもって説明し合う姿が見られた。

⑶実践の考察

本研究では、「歴史的事象と現代とのつながりに気付き、社会に対する課題意識をもつ生徒」の育成を目指した。「歴史的事象と現代とのつながり」について、生徒が単元末に記述した単元を貫く学習課題に対する答えの内容を分析したところ約７０％の生徒がＡ評価であった（**資料６**）。これは**【手立て１】**で生徒とともに考えた単元を貫く学習課題が、単元を通して生徒の中に残り続けたためだと考えられる。自分たちで設定した学習課題を単元の中で考え続けることは、有効な手立てだった。また、９０％以上の生徒が以前よりも歴史が身近に感じられるようになったと肯定的に評価しており（**資料７①**）、多くの生徒が歴史を単なる過去の出来事ではなく、現代につながるものとしてとらえられているとわかる。

この「歴史的事象と現代とのつながり」の理解が土台となり、**【手立て２】**の自分で選択した現代の課題の追究活動では、生徒が意欲をもって学習に取り組むことができた。約７０％の生徒が

選択した課題の歴史的背景を調べたうえで、課題に対する自分の考えをスライドで表現し、歴史を学ぶ意義に気付いたり自分の具体的行動を示したりした（**資料８**）。ほとんどの生徒が追究活動や発表が学びの深まりに有効だったと評価した（**資料７②**）。「自分で課題だと思ったことを調べることで、今までわかっていたことがもっと理解しやすくなったり、新たなことを学ぶことができたりしたから。」という生徒の意見があり、追究活動によって、生徒が自ら学びを広げようとしていると考えられる。

追究活動をするうえで**【手立て３】**を行ったことで、生徒が自分のペースで考えたり生徒同士で学び合ったりする姿が教室の随所で見られた。特に、学習する人数や場所を選んで学ぶ方法はすべての生徒にとって有効であった（**資料７③**）。「１人では分からない時に友達に聞いて助けてもらったりすることで、スムーズに活動を進められた。」「同じ課題を調べてまとめる人と学ぶことで相手が知っていること、自分が調べたことを共有したり、同じ問題を調べていても考えが違ったりして楽しく取り組むことができた。」といった生徒の意見より、自由に学び合える環境整備が主体的な学びにつながったといえる。授業者としても、生徒の学びの様子を見取りながら、「スライドに図を入れてみたら」「教科書のこのページを見るといいよ」といった声がけが生徒１人１人にしやすく、教師が生徒の学びを伴走するように支援することができた。

４　研究の成果

本研究の結果、ほとんどの生徒が社会に対する課題意識が高まったと答えた。具体的な変容として、現代の日本や世界への考え方の変化が挙げられる。生徒の記述からは、課題を身近にとらえ直したり、解決に向けた行動の意欲を示したりする様子が見られ、本研究が定義する課題意識の高まりが確認できた（**資料７④**、**資料９**、**資料１０**）。そして、一人一台端末を有効に活用することで、個別最適な学びと協働的な学びが自然な形で融合し、生徒の主体的な学びの力を高めることができた。

５　今後の課題

本実践は、歴史的分野の最終単元「現代の日本と世界」という、現代とのつながりが見えやすい題材であったからこそ成果が得られた。今後は、生徒にとって現代とのつながりが薄く感じられる近代以前の歴史学習において、どのようにして「現代への課題意識」をもたせることができるのか検討していきたい。また、生徒が一人一台端末を使って調べる様子を見ると、自分の知りたい情報を生成 AI に入力し、それをそのままスライドにコピー&ペーストしている生徒もいた。検索して出力された情報をそのまま載せるのではなく、情報を吟味して自分の言葉でまとめ直すように伝えたものの、スライドの内容に改善が見られない場合も多かった。今後は、生成 AI という便利なツールを生徒が利用することを踏まえたうえで、正しい活用の指導や生徒自身の思考力を高めていく方法を考えていく必要がある。

〈参考文献〉

川端裕介『川端裕介の中学校社会科授業　見方・考え方を働かせる課題設定＆評価スキル６０』（明治図書、２０２２年）
宗實直樹『社会科「個別最適な学び」授業デザイン　理論編』（明治図書、２０２３年）
文部科学省『中学校学習指導要領（平成２９年告示）解説　社会編』（２０１８年）
「令和７年度　富山県立芝園小学校　研修計画」